

3 シンガポール

民族服からブランドファッション

原田 忠夫

地下鉄開通（一九八八年）と服装

先ず写真をご覧いただきたい。これは、一九九一年九月二十日金曜日の八時五十分、シンガポールのビジネスセンターに位置する地下鉄駅、ラッフルズ・プレイスの出入口付近での出勤風景である。赤道直下とは思えず、東京は秋の日の昼休みの風景のように見える。それは、長袖、ネクタイ姿の男性と長袖と黒っぽいドレス姿の女性が目立つからである。

シンガポール男性の服装を考える時、先ず思い浮かぶのは、長袖ドレスシャツである。最近はこのネクタイを結ぶ人が急増している。半袖シャツにネクタイを結んでいる人は、日本人の駐在員か出張者である。長袖である理由は、日本、香港と違い、季節がなく、外套を脱ぎ、夏物に替え、上着を取り、半袖に着替え、またその逆をたどるといふ季節に伴う服装儀礼がないことである。日本人サラリーマンは、上着を着けてはいないが、これは暑さしのぎのためのほんの一時



地下鉄ラッフルズ・プレイス駅出入口付近（1991年9月）

の仮の姿ですよという本人の心理的言い訳と、その言い訳は社会的に通用するという安心感の下に、より涼しい半袖シャツを着ているところがある。シンガポールは、一年中暑いわけで、上着を着ることもまずないことから、「仮の姿」の心理的言い訳は効かず、肌を隠すことがより多く、心理的によりフォーマルに近い長袖シャツを着ることになるのではないかと思う。

ネクタイを結ぶ人が増えたのは、全車両と地下駅冷房の地下鉄の開通だろう。住宅団地によっては、汗をかかずに通勤できる。女性も、冷房病予防とお洒落を兼ねてストッキングをはくことが常識になり、スーツを着る人も増えた。上の写真でも二人が認められるが、女性でも書類を詰め込んだ重いアタッシェケースを颯爽と持ち歩く人も出てきた。地下鉄は、都市近代化の条件であると同時に、服装を垢抜けたもの、あるいは欧米志向に向かわせる効果があるようだ。

女性の普段着

十数年前までは、中国系の人たちの仕事着で最も際立った存在だったサムスイ、広東省三水出身の女性戸外労働者集団の赤い帽子に黒一色の作業着も、今やスーベニヤ人形にのみ姿を残すことになった。このサムスイの作業着もそうだが、中国系女性の普段着は、サムフーというツープースが原則である。サム（衫）は上着、フー（褲）はズボン。中国服の代表のように思われているチョンサム（長衫）は、清朝が持ち込んだ満州族の服装であり、結婚式のようなハレの場合にしか着用しない。サムフーは、家庭での普段着、市場での仕事着として、中年以上の女性に今も愛用されている。襟は、立領（中国式の立ち襟）、前見頃は、対襟（中央で中国式紐ボタンでとめる）か、大襟（右前にして右脇でとめる。これは和服と同じで男女の区別なし）かの二種あるが、大襟の方が仕立てに簡便なためが多く見かける。袖は、半袖か袖なし（欠肩という）、ウエストは絞り、短いスリットをいれる。ズボンの裾は、仕事着の度合いが強いほど、絞る。普段着の場合は、柄物が多い。晴れ着としてのサムフーは、シルバードレイの上着に、黒縹子のゆったりした裾広ズボン仕立てを多く見かける。

インド系の女性がサリーを手放すことはないだろうと思っていたが、勤め先で着る人は、まれになってきたようだ。シンガポールのインド系人口は、総人口の一割程度だが、従来はそのサリー姿やパンジャム衣装のためか目につく存在であったが、最近はいこれらの民族衣装を脱ぎ捨てたために、ワーキングウーマンのマスの中に隠れてしまったようだ。

町の仕立屋

男性ズボンは、仕立てが普通である。シャツ類は、デパート等で買うが、ジーンズは別として、デパートでも既製のズボンはまだ品揃えが少なく、値段そのものも仕立てよりも高い。シンガポール特有の高層団地の一角の一階には、郵便局、餐厅（軽食店）などと並んで洋服店がある。主人のイメージは、眼鏡、白の開襟シャツ、シャツの裾は外に出す、三把刀（渡航先で華僑がまず携わる刃物を使う三職種——料理人、理髪屋、仕立屋）の伝統そのものという顔をしている。道具は、裁ち台、裁ち鋏、足踏みミシンで、ロックミシンなどはない。値段は一五、六シンガポールドルから高くとも五〇ドルどまり。いつ出来上がりますかと聞くと、個人経営で、その時の都合しだいだから、明日という返事が返ってきて驚くこともある。無論仮縫いなどはない。

因みにシンガポールの英語版電話帳・イエローページで仕立屋の数を調べてみると、約六五〇店、中国語版のみに登録する店もあることから、実数は八〇〇店程度と考えられる。ほぼ同人口の神戸は約二二〇店。ドレスメーカーは、シンガポールで約二五〇店、神戸の場合は、小売店の中に埋没してしまい数えようがない。これらの店は、ズボン仕立て専門に近い。コートや裏付きスーツを仕立てる店は、Winter Clothes といって特別のカテゴリーに属する。

上記のチョンサムとかサムフーという言葉は、広東語である。福建人が多いシンガポールで、なぜ広東語なのかというと、福建人は商業に、潮州人は農業関係に、広東人は職人仕事にという棲み分けた歴史があるためである。もっとも洋服仕立てということになると上海人の得意とする

ところである。上海人でなくとも、上海を店名に付ければ客の入りがよくなる。「上海秀裕洋服店」とか「上海時装女服店」とかいった具合である。

シンガポール シンガポールには、アパレルメーカーが約三五〇社、三万人が従事している。その製品の八五%は輸出される。アパレルもシンガポールの他産業同様、高付加価値を求め高級化する中で、タン・ヨン (Tan Yong)、セリ

ブ ラ ン ド ア・ロウ (Celia Loe)、ヤン・デロン (Yang Derong) といった若手デザイナーが輩出し、シンガポールブランドが形成された。最近日本でも活躍中のマルチタレント、ディック・リー (Dick Lee) もその一劃を占めており、彼自身のブランドも含め、これらブランドショップを集めたショッピングコンプレックスを、シンガポール最大の繁華街であるオーチャード・ロードの入り口にあたるペナン・ロードに勢いにまかせて建ててしまった。輸出向けブランドの発展と自由港としての輸入ブランドの氾濫の中で、女性の服飾は、長袖シャツ、ネクタイ以外にはない男性を取り残して、いつそう華やかになっていくような気がする。

(はらだ ただお／アジア経済研究所総務部研究主幹)